秋成と「才智」

冨江香之子

一

上田秋成の『藤簍冊子』は、文化三・四年に刊行された歌文集なのだが、その巻四に「月の前」「剣の舞」という小説的二作品が、入っている。前者は、頼朝と西行の出会いを作品化したもので、後者は、鶴岡八幡宮において、静が頼朝の前で舞を舞う場面の作品化である。これらの執筆時期が、『春雨物語』中の歴史物語の初稿が成った頃と重なるため手法などの点で関連が言われ、[1] 秋成晩年の作風を窺う上でも、重要な作品であるとされている。[2] この二篇で秋成は、『吾妻鏡』『大東世語』『義経記』等を典拠としながら、独自の改作によって、秋成が考えるところの頼朝像・西行像・静像を作り出している。そこでの頼朝像は、肉親である義経を危うい立場へ追いやったことを、西行・静に批判される人物となっており、その頼朝が批判されている部分に対して、これまでの研究では、「頼朝の義経に対する姿勢・行為についての間接的な批判であり（中略）秋成の頼朝批判を通じての頼朝像がつまっている」[3]「秋成の意図は静の舞の詞章を通じての頼朝批判にある」[4]（以上、美山靖氏）「頼朝は一貫して心のねじけた残忍な武将として書かれている」[5]（東喜望氏）などとされていて、秋成が全面的に頼朝を批判しているかのように言われることが多い。確かに、この二篇の中で頼朝は批判され、残忍かつ心ねじけた人物という評価を与えられているが、そこに描かれる頼朝像には、そう簡単に一言で

言い切ることのできない、微妙な揺れがあるように思う。頼朝像の再検討を出発点として、なぜそのような揺れが生じたのかについて論じていきたい。

二

「月の前」において、西行の暗に頼朝を諫める言葉を聞いた頼朝は、

君ゑみほこらせたまひ、「口とく心さとき法師なり。こよひは月見る夜ぞ。物がたり今ははたしてん。人々とかはらけとりはやし、晩かけて遊ばん。(傍点筆者)

と満足げに「ゑみほこり」全く動揺した様子を見せていない。西行が暗に指し示す内容、意図することを十分に察し、把握した上で、さらりとかわしている。表面は柔和な顔をし、西行の真意には気付かぬような振りをするが、その内心には、それぐらいのことで自分は揺るがされないのだという、頼朝の強い姿勢と自信、余裕を感じることができる。

次に、頼朝下賜の銀製の火取りを、西行が門前で童に与えたのを知った頼朝に注目する。頼朝は、まず「君打ちゑみたまひ」と描写された後、

法師とても男だましひなくば、修行もえせぬなるべし。されど家を出でて猶身を守り、才に誇りて、野山にまじり、歌よみてのみあるは、捨人の棄てらるべきあさましさぞかし。

と、西行批判の言葉を吐いている。しかし、西行の行為に対してすぐさま激怒するなどの直情的な行動はとらず、ここでも含みのある笑みを浮べている。西行のしたたかな人物を理解し、一応の評価はしながらも、超俗という点を、現実的な支配者の眼で切り捨てている。

「剣の舞」でも、同様の描かれ方をしている部分がある。頼朝の非を責め、義経への変わらぬ思いを憚ることなく歌い、舞った静に対する頼朝の態度なのだが、

大将殿おぼす、「はての剣の舞は、我を憎しとてうちしならめ。さは物かづけたりともうれしとも思はじ」とて、御硯召して、御たゝうの物の香しめる紙に、御筆はしらせ、取りつたへさせ給へり。

とあり、静を慰める気持ちを綴った歌を二首送っている。ここでの描かれ方の特徴は、典拠とされた『吾妻鏡』『義経記』と比較すると、より一層はっきりする。『吾妻鏡』では

尤可レ祝二関東万一歳之處。不レ憚レ所二聞食一。慕二反一逆

義経。歌別曲奇怪云云。

静の意を汲み取った頼朝は、悄然としており、その後政子の執り成しによって、機嫌を直している。『義経記』でも、

鎌倉殿、御簾をさつと下し給ひけり。……あ憎し憎し

と言っているところを、政子になだめられている。この二作品では、頼朝が表情を表に現わし機嫌を悪くしたのを、政子が執り成すというふうになっているが、「剣の舞」では正反対に改作され、怒ることが自然であるのに、全くその素振りも見せず、情け深くいたわりの愛情を見せている。

これらのことから、頼朝は、秋成によってただ単に肉親である義経をも軽んじる、残忍でねじけた性格の持ち主というだけでなく、思慮深く、人間的に度量の広い、一種の懐の広さを感じさせる人物として、描き出されていると思われる。

秋成が頼朝の性質を端的に言い表わしたことばは、他に『胆大小心録』の中にも、

佞にして奸にして、智あり勇あり術ありどうもこなされぬ大将ゆへ、とうと天下を総追捕使じや。(四八)

頼朝卿は智勇の大将にしてましましければ……(一三三)

と、述べられている。頼朝は、内心がねじけていてよこしまで、その上に智も勇も術もあるので、思うまま自由に扱うことのできない人物で、「智」ある人だとしている。頼朝に対してなされたこの人物評価には、先程述べた「月の前」「剣の舞」の頼朝像と、重なる面が見られる。そこで秋成の言う「智」という言葉に着目し、「智」とは、如何なる意味を持つのか、その内容を『胆大小心録』や、『茶寮酔言』などを中心に考察していくことにする。

三

秋成において「智」は、しばしば「才」と対になって論じられる。まず最初に「才」ある人とは一体どのような人であるのか、歴史上の人物についてみていくことにする。

秋成は、「才」ある人として大友皇子を挙げている。『胆大小心録』一五六では、

才学いにしへよりならびなき君ゆへに……大友は才にほこりて兄弟を悔どり、老臣を見くだし、叔父にはねたくおぼせしなり。大友の才くらぶる人なきが、亡ぶべきいはれなり。詩文の祖とは此君なり。

としており、絶世の才にほこり、肉親達と情を交わすことなく軽んじたために、叔父のねたみを買い、世を奪われることにも

なったのだ、並びなき才がすなわち亡ぶ原因だと評している。

また一五七では、大友皇子と共に大津皇子・源実朝の例を挙げて、

是も才をたのみて、無益の誹りをもとめたまいしなり。

と、自分の才をあてにしたために、自ら進んで人からの誹りを受けるようなことになったと述べる。

さらに『茶寂酔言』六一では同様のことを今度は源実朝について記している。

才に驕りて、かく人に超たる所おはせば北条義時おそれて、公晩と云僧に弑させし也。才の花々しきは、歌よみたまふに……。定家卿「この公の歌を見奉れば、此道の物うくなるよ」と、老て悔みたまふと也。

才に驕ったことが、暗殺されるという悲劇にもつながったのだけれど、歌をよむことにかけての才は、定家も舌を巻くほどであったとするのである。

こうして考えてくると、秋成は「才」自体を否定しているのではなく、才がありすぎるために、「才にほこり」「才に驕り」「才をたのみて」良からぬ欲心を起こし、その結果身を滅ぼすことが、愚かであるとしていることがはっきりする。

秋成が、大友皇子・大津皇子を「才」ある人だと評したことを見てきたが、『茶寂酔言』六〇では、この二人のことを「すべて智は足ぬ失也。」と述べている。「才」は亡ぶべき要素を内包しているが、「智」さえあれば、それが回避できたというのだろうか。「才」になくて「智」にあるものとは何なのか、才と智のどこが違うのか。次に、「智」ある人について言及する。

同五九では天武天皇のことを、

天武は智略の主也。一たび僧となりて、よしの山に入、時を待て、兵を起し、大津の宮を返し給ふ也。

と述べ、一旦は身を引いて機が熟するまで待ち、兵を起こしたので、世の中を手に入れることができたのだとし、同六二には

才子はす、みて陥し入らる。智者は静まりて時を待て起る。

と記している。才子は、自らの才によってむざむざと他人の計略に陥るようなはめになりかねないが、それとは逆に智者は、周りの情況を冷静に見極め、判断した上で、行動を起こす人だというのである。

『遠駆延五登』では、天武天皇について

天武は智略の君、節を屈りて人に謙り、能く人の心を買はせたまひしかば、遂に志願をはたさせ給ひしなり。

とあり、堅固に自分の主義・主張を通そうとしない、人の意見

に耳を傾ける柔軟さを持ち、人を敬い謙遜することでうまく懐柔し、自分の思い通りに動かすことができたからこそ、成功したのだとしている。智者の要素は、現実を客観的に判断し、冷静沈着に行動する思慮深さにあるといえよう。

源頼朝については、先程『胆大小心録』の例を挙げ、智者であることを示したが、『遠駛延五登』にも実朝と比較して述べられており、

公の才父大将殿の智におとり給ふ事かくぞありける。……上智の人いにしへより数へて乏し。大かたの智者は佞奸をかぬる。恐るべきは智者の心也。（傍点筆者）

頼朝の世に稀なる智を認めるが、智者の大部分は、「佞奸をかぬる」としている。その佞奸をかねる佞人について、秋成が述べた文章がある。『遠駛延五登』とほぼ同時期に書かれた『金砂』四に

佞人と云は智在て道に従はず、己が心をのみ頼みはつるも、時にあひあはぬ有、あへば世に立ほまれ高く其終をよくす、あはでも亡ぶまて表裏の心を持て、人をあやまつ事をつとむ、世にあひても後の世に悪みおとしめらるゝを見れば、是はたあだしわざなりける、……さるはねぢけびとの二心より出て、表を丈夫の忠言に譌りたるには、まことの道には吐はて、横しまの言のとゝのひたるにぞ、人欺れぬべし、たゞ〳〵おそろしきは言の巧み也、

とあり、確かに佞人には智があると記している。時勢に合った佞人は、名声を得るが、合わない時は表裏のある心で人を陥れることばかり考え、佞人の巧みな言葉に人はたやすく騙されてしまうのである。だが、結局は後世謗られるものなので、愚かなことだと否定的に見ているようである。無論、智者すなわち佞人であるとは言い切れないであろう。しかし「佞奸をかぬる」智者に対して、何か裏で謀をめぐらしているかのような、油断のならない腹黒い部分を感じ、懐疑心を持ってとらえていたと思われる。だからこそ「恐るべきは智者の心也」という言葉になったのであろう。

吉備真備は、才智兼備の人とされているのだが、真備と同時代人、和気清磨が不遇であったのに同情を寄せるのとは違い、真備が要領よく朝廷の中で生き残っていったことに、秋成は反感を抱いていたようである。真備について『遠駛延五登』では

吉備公の才学は菅相公にならべて人賞す。……惜むべし、智略の人にて有りしかば、……昇進とゞこほらず、右大臣従二位に任ぜられし也。……是智略の人の進退は我にありて、君の御為世の為にならぬ者也。

と、その才学の高さについては認めるが、智略の人であったことを、惜しむべき点としている。智略の人の進退は、自分を中心に考えたもので、世の為君の為にはならない、すなわち、自分の身を大切にし、自分のために動き、自分の利益を追求する利己自義の持ち主であると述べているのである。

ここまで具体的な用例にあたって論じてきたが、どうも「智」にはプラスに働く面と、マイナスに働く面の両面があると思われる。「才」は、それに溺れることで自分の立場を見失ってしまうような危険性をはらんでいるが、「智」には現実を冷静かつ客観的に見極め行動できる判断力が備っており、それは、成功につながるものである。しかし、その判断力があまりにも冷徹で、利己的に使われる時、人を陥れかねない抜け目のなさを、発揮するようである。

四

秋成が「才智」の本質について述べた文章に、もう少しあたってみることにする。

先程、一部引用した『胆大小心録』一五七では、「才智」の本質は花にたとえられている。

> 才は花、智は実、花実相そなへし人かたしかし。……才は花なればもろくちり、実は智にて利益あるから、人を損害するなり。西土にても智者と云ふは必ず悪臣なり。

また、これも先に一部引用したものであるが、『茶酔言』六二では

> 才は花、智は実、むすびとゞめて利益ある事まされり。才子はすゝみて陥し入らる。智者は静まりて時を待て起る。故に智者の才を兼たるも、智にこめられてあらはれぬるあり。

と、才は花のように美しく、人目をひく魅力があるものの、それだけに移ろいやすく、もろくも散ってしまう性質であるとしている。それに引き替え、智は実が結ぶように次へとつながる豊かさがあり、利益をもたらすものなので才より勝っているが、その利益は人を損害する毒ともなるのである。

「才智」を運命的にとらえている文章もある。『茶酔言』では

> 才は強に似て弱、智は弱に似て強也。天稟なれば各いかにせん。……（六五）
>
> 才の清、智の濁、相叶はずして相交はる。是群に出し人々なれば也。（六六）

と、才の濟、智の濁として、その性質をとらえており、才のもろさと智の柔軟な強さを述べた上で、それぞれが天稟のもの、つまり天から与えられた生まれ持っての性質であるので、自分の力ではどうしようもない、思いのままにはならないものだと、運命づけて考えていることにも注意しておきたい。

才者である仏印が、蘇東坡の智にはかられて僧になったという論が『胆大小心録』一〇六に見られる。

佛印の才は東坡にこへたり。論談弁説、是も東坡が敗をとりしに、智に斗られて思ひがけなく僧となりしを思へば、智といふは大かた悪才也。

同様の論は、『遠聽延五登』にもある。

噫、佛印が才識の弘きに、平生東坡と交りて闘論諧謔、一事も敗をとらず、此はかられしに思へば、佛印は英才、東坡は才智具足の人と云ふべし。才の智に及ばざる事かくの如し、ただ智者の心のおそろしさ、東坡は佞奸をかねざれども、人を弄ぶにおきては憎むべし。

このどちらにおいても、仏印の才は蘇東坡と比べて勝り、負けることなどなかったのに、東坡の智によってはかられ陥れられた、「才の智に及ばざる事かくの如し」と、ここでも智の強さに優位を認めている。しかし秋成は、どちらかというと智にはかられた才者仏印に同情を寄せ、智者東坡に対して憎しみを抱いていたように思われる。そして、「智といふは大かた悪才也」という文や、これまで引用してきた「智者と云ふは必ず悪臣なり」「智の濁」などという部分から受ける印象では、やはり智がもたらす毒に対して秋成は、好感を持っていないようである。智のプラフに働く面には、正しくその力を評価するものの、マイナスに働く面に対しては、心情的に許し難いものがあったといえよう。

五

秋成の言う「才智」の意義を限定し、秋成が人物評価をする際、如何に「才智」が重要な基準となりうるかについて述べてきたが、次に秋成は、自分自身の持つ「才智」に、どのような感情を抱いていたかを考えてみることにする。

『胆大小心録』などとほぼ同時期の最晩年に書かれた「自伝」において秋成は、

故郷を去り六親を離れ、産業なきものは狂蕩の子と云ふ、智略にて家をおこすも道にあらずと聖人は教へ給へりきとぞ。智略なき性に心いらんよりは、狂蕩と呼ばれておのが

まゝならんとて、かくて老い朽つるまではありけり。（傍点雑者）

と、生涯を振り返り現在の心境を語っているのだが、そこで自らを「智略なき性」と評し智略によって家を起こすことが出来ないとしても、自分に智略のないことはどうすることもできない、そんな事に心を労するよりは、「狂蕩と呼ばれておのがままならん」と、思いのまま生きて来たのだと、諦観とも開き直りともとれる自己肯定を行っている。しかし元来秋成の生活倫理とは、家業をよく務め世に立ち交わっていくべきだというもので、自分が学問や文芸という何の生産性もない虚業に、手を染めて生きるしか出来ないことに、終生引け目を感じていたことはよく知られている。中村幸彦氏は、

世間が濁れば、怒らず怨まずその中にまじらうべきだと、自答するが、それが出来ない。……「あだ心」「いたづら者」と反省しながらも、現実を逃避して、自己に生きんとする。(6)

と、秋成にはそうすることしか道がなかったのだと述べておられる。その秋成のやりきれない自己反省、自己批判が、『癇癖談』の末尾に示されている。世を厭い隠棲するその宿の主人と秋成自身とを重ね合わせて、鳥たちに批判させるというもので、自らを「何をわたらひにするともなきいたづら人なり」と規定した上で、いざ現実に接すると世間の悪を許すことができず、書物や文芸に接すると昔のことばかり親わしく思われ、益々現世が嫌になる心を、「世のおごりものか。あさましのこゝろざまなれ」と、それは生業を務めない我儘な逃避行動であり、精神的な贅沢だと自己批判している。また、

表面をにごらざれば、世にはまじわりがたし。此のあるじが輩は、これおこなふ事あたはぬものなり。にごるといへば、悪むべきを、たゞ世のありさまと見ば、ことごとしくいむべきにもあらず。

と、自分を曲げなければ世とは交われないしこれが現実なのだと客観的に認めて、流れに身を任せ立ち交わっていくべきだと自分に言い聞かせるが、どうしても抑制のできない我身を顧みて、「我がしこのこゝろおごりなり」と評している。

『春雨物語』の「二世の縁」では、堀り返された入定の僧が、何の効験もなくあさましい姿で生き続ける様子が描かれている。そして、その男を見た村人達に次のような言葉を言わせている。

あさまし。仏ねがひて浄土に到らん事、かたくぞ思ゆ。命の中よくつとめたらんは、家のわたらひ也。

この部分を受けて、日野龍夫氏は、

入定だの極楽往生だのという愚かな願望を持たず、生きている限り家業に精を出すのが人の正しいあり方だとする思想が表明されていると思われ、……国学者としての仏教批判と〝狂蕩の子〟としての〝罪〟の自覚の結合した思想、(7)であると解釈されている。狂蕩の子として生きていくことが、人の道に反するとわかっていながら、それに従えなかった秋成は、入定の僧を批判すると同時に、内省的な眼を持ってして、自らの身の上が深く思いやられたであろう。そして、生業を務めて生きていくべしという思想は、秋成の中で絶対的な位置付けがなされているのだと思う。

秋成の内心に葛藤があったことは、『胆大小心録』六九にあるとおり、生業である医者を辞めた時、

母が前へひたいをつけて、「不幸の罪此上なし」と申したれば、

と、額を付けるまでして母親に詫びたことからもわかるのだが、これらの葛藤があった上で、前掲『自伝』での「狂蕩と呼ばれておのがままならん」という自己肯定、生涯の結論が出されているのである。

『金砂』十に、万葉集巻五山上憶良の「令反惑情歌」を評した文章がある。この歌は、父母や妻子を顧みず、世間に背を向けて生きようとする人を諫めて、迷った心を俗に返らせようとしたものである。まず秋成訓による長歌と反歌を挙げる。

父母を、見ればたふとし、女子みれば、めぐしうつくし、
世の中は、かくぞことわり、……うけ沓を、ぬぎつる如く、
ふみぬぎて、行ちふ人は、岩木より、なり出し人か、汝が
名のらさね、此てらす、月日のしたは、あま雲の、むかぶ
す極み、谷くゞの、さわたるきはみ、きこしをす、国の真
ほらぞ、かにかくに、ほしきまにに、しかにはあらじか、

反歌

ひさかたのあま路は遠くなほ〳〵に家にかへりてなりをし
まさね（傍点筆者）

秋成は、この長歌反歌についてこのような解釈をしている。

歌は父母貴むべし、妻子恵みつべし、世のことわり也、
……地にすまば御国のかぎりは法あるからに、おのがま、
なるべからず、さらば人なみ〳〵に家ををさめ所業をつと
めよかしと示す也、志篤く信ある人の作也、

父母を貴び妻子を愛することは、当然のことで、この世に住むかぎりは自由になどなれない、世間の人と同じく生業に励むべきだと示した歌であると述べている。また、歌の作者に対し「志篤く信ある人」と、その行為を高く評価している。

この歌を見た秋成は、まるで自分が諫められたかのように感じ、この歌の冒葉は、秋成を刺激し、胸に突き刺さったのではないだろうか。思わず我身が顧みられた秋成は、

惑ふ者己が才学の煩ひにて、即愚に陥るを知らぬ也。かく云老もこの愚をもて一生をあやまれり、此歌を読て見る毎に、悔の八千度の歎きかへるべからず

と、万葉集の注釈書であるにもかかわらず、自分に引き寄せて、生涯の尽きない悔を嘆いている。才学があるばかりに、自分は俗人ではないと思い込み、父母を貴び妻子を慈しむことを軽視して、生活のために家業に励まず人と交わろうとしないというのが「愚」なのである。ここに秋成の、「愚」によって一生を誤り、世間に背を向けて生きて来たことへの自責の念を見ることができる。

淡路庄村に退隠後まもなくに書かれた『鵂の屋』では

あはれ世に立ち交はるべき身は、其程々につけて智といふ物のあらまほしき。そも習ひもて付けたらんが、己が性の如なれるはいとも難しかし。常にはかど〳〵しく打ちふるまへるも、いでや事にさし当りては、我心から頼もしからぬよ、父母のたま物ならぬをいかにせん。世のしれ者に嘲めらるゝ身の、人には立ち交はるべうも有らじなど、やう〳〵思ひしめるも、此二十とせばかりが程、はかなき世に立ちさまよへるを、おぼし返すによりてなりけり。……

（傍点筆者）

と自分の身に智が乏しいことを嘆き、世に立ち交わっていくには、智が必要であり「智といふ物のあらまほしき」と智を身に付けたい、智が欲しいと願っている。しかし、自己の性格を考え合わせると、生まれもって備っていないものはどうすることも出来ないと、智を手に入れることに対して、悲観的に見ているようである。そして、「世のしれ者に嘲めらるゝ身」と自らを称し、「人には立ち交はるべうも有らじ」と「思ひしめる」ようになったのだとしている。

これらの事から考えると、秋成は自身の「才智」について、才は十分に備えるが、智は足りないという評価を下していることがわかる。確かに、己の才には相当の自負を抱いていたと思われ、己を偽ろうとはせず、忠実に生きることを決意し、学問文芸の世界に遊んだのであろう。だが、才があったが為に素直に世と交われなかった自己を顧みて、悔いる気持ちが強くあったと思われる。現実にうまく処していく能力のある智を、身に付けることは不可能であると諦めながらも、一方では強く欲していたようである。

六

以上、「才」「智」の内容・本質について述べ、秋成は、「智」に対して、冷静かつ客観的に見極める判断力と、現実にうまく処していくことの出来る行動力などのプラスに働く面は高く評価するが、人を陥れるような邪悪なマイナスに働く面は、否定的に、受け入れ難いものとしていることを見てきた。そして、自分自身の「才智」については、自分の生活倫理を貫き通すことが出来なかった負い目から、自分には「才」はあるが「智」はない、「智」を身に付けたいと強く欲していたと論じてきたが、再びここで「月の前」「剣の舞」に見られる頼朝像へと話を戻してみたいと思う。

二作の中で描かれていた頼朝は、深慮遠謀で抜け目なく、まさに秋成が「智ある人」に抱いていたイメージの具現化であるといえよう。また、頼朝の肉親であっても容赦しない佞奸な部分を、西行・静によって批判させたのも、秋成が「智」のマイナスに働く面を難じたためであろう。だが、頼朝を悪人として徹底的に描ききっておらず、人間的な大きさを感じさせるものとなっているのは、秋成自身の「智」に対する思い入れと関わりがあるのではないかと思われる。世に立ち交わり、身を修めて生業に務めるべきだとしながら、それに従うことが出来なかった秋成は、「智」を強く欲していたのだが、その「智」を備えもつ智者に対して、一種の羨望にも似た、憧れを抱いていたといえないだろうか。だからこそ、智者頼朝を頭から否定しきれずにいるのだと考える。

つまり「月の前」「剣の舞」に見る頼朝像は、秋成自身の「智」への憧れと、密接な関係があると思うのである。

注（1）中村幸彦氏『春雨物語』昭22積善館解題二三八頁
（2）重友毅氏校注『日本古典全書　上田秋成集』昭32朝日新聞社　解説二三頁
（3）英山靖氏「『月の前』について」昭46・10『皇学館論叢』4の5三〇頁
（4）同「秋成の鎌倉三部作について」昭44・4『皇学館論叢』2の2二二頁
（5）東喜望氏「春雨物語『歴史小説』の検討」昭42・12『文学研究』第二六号『日本文学研究資料叢書秋成』所収二二九頁
（6）中村幸彦氏「上田秋成の人と思想」昭35・4『近世文芸』第五号　『日本文学研究資料叢書秋成』所収一四六頁
（7）日野龍夫氏「老境の秋成」『宣長と秋成』筑摩書房所収

二七九頁

本文中に引用した秋成関係の文献は、以下のテキストに拠った。

「月の前」「剣の舞」日本古典全書『上田秋成集』重友毅氏　朝日新聞社昭32

「胆大小心録」「二世の縁」日本古典文学大系『上田秋成集』中村幸彦氏　岩波書店昭34

「遠駝延五登」「自伝」「鵜の屋」『秋成遺文』藤井乙男氏　国書刊行会昭49

「茶痴酔日」『近世作家研究』中村幸彦氏　三一書房昭36

「金砂」『上田秋成全集』岩槻小弥太氏　図書刊行会大7